

「地球の危機と人類の進化」より

多様な「私」が解放される時
人類の意識が進化する

インターネット革命のもう一つの意味

自分の中に「いくつもの自分」を発見する

目の前で苦しむ人の姿は「可能的自我」

本稿は、2009年に講談社が運営していた
ウェブサイト「エコログ」のインタビュー記事
「世界のエコイストたち」の一部を再構成したものです

多様な「私」が解放されるとき 人類の意識が進化する

田坂 我々が、我々自身の心の中に、「私」というものを複数認める時代に入っていくだろうと思います。これが、『未来を予見する「5つの法則」』で述べている「多重人格論」、「マルチ・パーソナリティ論」です。

実は、我々は未だ「ペルソナ（仮面）の時代」を生きているのです。しかし、これから我々は、「脱ペルソナ社会」を迎えるでしょう。そのビジョンを、この本の中で述べています。

では、「脱ペルソナ社会」とは何か。我々が、たった一つの「ペルソナ（仮面）」を被って生きていくのをやめ、幾つものペルソナを自由に被りながら生きていく社会が到来するということです。例えば、私自身、大学で講義するときは、大学教授としての自分がある。「先生」と言われれば「はい」と答えます。しかし、久しぶりに大学時代の友人に会えば、やあやあと、昔の若いころの自分が出てきます。しかし、企業の経営者としては、ときに厳しいマネジャーの姿も現れてきます。

そのように、我々は、自分の中に様々なパーソナリティを持った自分があるのですが、これまでの社会は、非常に規範が強い社会であるがゆえに、我々は無意識に、一つの人格で生活し、働くことを求められるのです。分かりやすく言えば、教授ならば、教授らしく振る舞わなければならない。経営者ならば経営者らしく振る舞わなければならない。また、社会も、我々に対して無言で、「あなたは、どういうパーソナリテ

ィの人ですか」を聞いてきますから、我々は、それに対して、混乱や誤解を避けるために、自分の中にある一つのパーソナリティや人格で生きるように努めるわけです。

しかし、実は我々は、自分の中に色々なパーソナリティ、様々な自分を持っているのです。すなわち、我々は誰もが、自分の中に、「マルチ・パーソナリティ」が存在しているのです。そして、もし人類の意識が進化していくならば、まず、こうした「マルチ・パーソナリティ社会」や「脱ペルソナ社会」と呼ぶべきものが、到来するでしょう。

実際、自分の心の中を見つめると、我々の中には、様々な自分があります。例えば、朝、満員電車に乗り込み、人ごみと格闘しながら通勤する自分もいれば、深夜、自宅へ帰るとき、駅を降りてふっと夜空を見上げ、きれいな満月だと思ふロマンティックな自分もいる。そのとき、田舎の両親を思い出して、元気かなと思ふ親孝行な自分もいれば、赤提灯で、部下と仕事の話に盛り上がるマネジャーの自分もいる。心の中に、そういう色々な自分があるにも関わらず、我々は、社会的には、混乱と誤解を避けるために、無意識にその多くを抑圧し、一つのペルソナで生きようとしてしまうのです。

インタビュアー ええ。

田坂 これが、「集合的意識」や「集合的無意識」の世界に、何かのストレスを生み出しているのです。そして、それが、ときに一人の人間の心の病になるときもあれば、社会的病理と呼ぶべき現象を生み出すときもある。

自分の中にいる、様々な自分を自由に表現できない。それがゆえに、そこに無意識的な抑圧が生まれる。例えば、会社では辣腕のマネジャーとして走っている人の、実は、心の中にロマンティックな詩人がいるかもしれない。それにも関わらず、そのマネジャーは、その詩人を抑圧してずっと生きていくわけです。

そして、こうした抑圧というものが潜在意識の世界で蓄積されると、しばしば、病的な何かが起こる。抑圧というものは、表面意識では気がつかないため、そのマネジャーは、「俺は、辣腕のマネジャーだ」と思いこんで走っている。しかし、実は、心の中で詩人を抑圧している。その抑圧したものが、ときに精神的な病の原因になり、ときに、心の奥から衝動的に湧き上がってきて、外から見ると、エキセントリックな行為を引き起こしたりする。

これを人類全体で見れば、人類全体の集合的無意識の世界で何かの抑圧が蓄積しているのかもしれない。おそらく、この21世紀の初頭における人類の文化が、いまだに、かくも闘争的で破壊的であるのは、そうしたことに根本的な原因があるのでしょうか。従って、この戦争や破壊の問題は、本質的には、その集合的無意識の世界の問題であり、おそらく、各国が平和条約をいくつ結んでみても解決できない根源的な問題があるのでしょうか。

インターネット革命のもう一つの意味

田坂 これから我々は、我々の中のマルチ・パーソナリティを、何らかの形で解放していく時

代に入って行くのでしょうか。そして、では、それをいかなる方法で行うかと問われれば、やはり、インターネット革命なのですね。

インタビューアー なるほど。

田坂 インターネットは、自分たちの中のマルチ・パーソナリティを表現するのに非常に優れた場を生み出しています。例えば、ネットのコミュニティで使われる「アバター（化身）」。様々なネット・コミュニティに行くと、社会的な肩書の自分ではなく、こういう自分を演じたいというアバターを作り、そのアバターを使って、コミュニティで活動し、発言する人々が増えています。

こうしたアバターは、人間だけではない。ときに動物やアニメのキャラクターになってコミュニティに参加する人もいます。それは、パーソナリティだけでなく、ジェンダーも変えることができる。女性であるにも関わらず男性を偽ってコミュニティに参加することもできる。

もし、これを実際の日常生活で行うと、やはり、誤解や混乱を生み出す。しかし、インターネットの世界では、そうした誤解や混乱を引き起こすことなく、匿名的に、自分が生きてみたい人生を生きることができるのですね。いや、そこまでやらなくとも、単なるメールやブログを使うだけで、会社では辣腕のマネジャーが、ブログでは名前を変えてロマンティックな詩を發表するというようなことは、いくらでもできるのですね。

実際、そうした小さな人格変容を、日常、身

近でやっているのが、カラオケでしょう。カラオケに行くと、歌っている最中、みな、人が変わりますね。みな、別な人格になって歌っているのです。カラオケで、辣腕のマネジャーのまま歌を歌ってる人はいないですね。やはり、そこで違う自分が出てくる。ただ、カラオケの場合は、酔ってからむとか、お金かかるとかいろいろ問題がありますけれど(笑)。

インタビュアー はい(笑)。

田坂 このように、インターネットというメディアが発達することによって、これまで抑圧してきた自分、自分の中に眠っている幾つもの自分を、生きることができるようになってきた。ただし、これはまだ序曲に過ぎない。これから何が始まるかという、人々の意識において、「私とは何か」という意味が拡がり始めるのです。

自分の中に「いくつもの自分」を発見する

田坂 「可能的自我」という言葉があるのですね。社会学者の加藤秀俊さんの言葉だったと思うのですが、この「可能的自我」とは何かといえば、「あの人の姿は、自分の姿であったかもしれない」という意味です。

例えば、ある人が、若い頃ミュージシャンを目指していたとします。しかし、彼は、実社会に出るとき、その道を諦め、会社に入った。しかし、彼の友人は、貧乏に耐えながらも頑張っ

たミュージシャンの道を歩んだ。あるとき、その友人がコンサートやるので、それを見に行く。

そのとき、彼は、その友人の姿に「可能的自我」を見るわけです。「俺も、彼みたいな生き方をしていたかもしれない」と思う。

この「可能的自我」という捉え方は、非常に大切です。いまの話は分かりやすい話ですが、自分でも気がついていない「可能的自我」がある。そして、それを発見することは、自分の中に幾つもの自分を発見するということです。例えば、いままで辣腕のマネジャーで、自分でもビジネスが全てだと思っていた人が、実は、心の奥深くにロマンティストの詩心があったとする。その人は、それまでは、詩人のような人間を見ると、ああいう人はロマンティストだねと言っていた。けれども、ふと、自分の中にもその「詩人」がいることを発見したとき、彼は、その「可能的自我」の発見を通じて、自分というものが拡がっていくのです。

そういうプロセスを経て、我々はおそらく、他者と自分の中に共通に存在する何かに気づき始めるのです。先ほど申し上げた、「私」というものが拡がっていくプロセスというのは、一つには、こうした「可能的自我」の発見というプロセスでもあるのです。

インタビュアー ええ。

田坂 実は、この「可能的自我」というものを理解するとき、その本当の意味が分かってくる言葉があります。それは、「共感」という言葉。では、この「共感」という言葉の意味は何か。我々は、この言葉を、「憐憫」や「同情」という言葉と混同してしまいます。しかし、この「憐憫」や「同情」という言葉には、自他の分離が

ある。すなわち、「あの人は、可哀そうだ」と思うとき、そこには、「あの人」と「自分」を切断して捉える、密やかな自他の分離があるのです。

これに対して、「共感」という言葉の本当の意味は、相手の中に可能的自我を見るということです。いま、アフリカで苦しんでいる子供たち、貧しい子供たちを「あの子たちは、可哀相だ」と思うのは、まだ同情の段階ですね。しかし、それが共感の段階に深まると、受け止め方が違ってくる。彼らの姿を、可能的自我として捉えることが出来るようになる。「あのアフリカの子供たちの人生は、実は自分の人生であったかもしれない」という感じ方です。それが、「共感」という言葉の本当の意味なのです。

インタビュアー ええ。

田坂 我々は、幸いなことに、この20世紀から21世紀にかけての日本という、世界でも稀な恵まれた国、豊かな国に生まれた。しかし、我々がこの世に生を享けるとき、それは自分の意志で選んだのではない。もし、我々がこの世に生まれてくるとき、何か、サイコロのようなものを振って、どの時代の、どの国の、どのような境遇に生まれるかを決めるとするならば、我々は、現在ほど恵まれた国、豊かな国に生まれおちる確率は、わずか数パーセントもないのです。そのサイコロによっては、我々は百年前のインドに生まれてきていたのかもしれない。百年後のアフリカに生まれてきたかもしれない。

それゆえ、世界の恵まれない国の人々の姿を見るとき、「もしかすると、あの人々の人生が、自分の人生であったかもしれない」という感覚、

可能的自我の感覚が自然に芽生えてもおかしくないのです。そして、もし、そうした可能的自我の感覚が、自然に多くの人々の心の中に芽生えてくるならば、自然に、我々の心の中の「私」という言葉の定義が広がっていくのです。

目の前で苦しむ人の姿は「可能的自我」

田坂 しかし、この可能的自我の感覚を、「人類、皆兄弟」のように宗教的なキャッチフレーズで語ってみても、あまり意味がない。なぜなら、それは、ただ、言葉で語り、頭で思い込んでいるだけです。

しかし、共感という言葉は、頭で考えるのではなく、心で感じるという世界なのです。従って、自分の身体的な感覚で、「世界の色々な人々の姿は、実は、自分の姿であったかもしれない」という感覚になるときに、我々の中の「私」という言葉の意味が、自然に大きく広がっているのです。

インタビュアー ええ。

田坂 若くして亡くなった哲学者の池田晶子さんが、ある著書の中で、「テレビで、歴史のドキュメンタリーを観ていると、涙が止まらない」と語っていました。

実は、私も、歴史のドキュメンタリーを観ていると、胸が熱くなる時があります。そのことは、『複雑系の知』（講談社）という著書の中で書きました。

例えば、ベトナム戦争の末期、サイゴンが陥落するとき、戦火から逃げようと、ベトナムの多くの家族々が船に乗り込む。しかし、全員が乗ることはできないため、旦那さんは、奥さんと子供だけを船に乗せ、自分は残って見送る。その最後のシーンは、埠頭から旦那さんたちが必死に手を振って妻子の乗った船を見送るシーンですが、その映像を見ていると、この家族は、どのような思いで、この別れの瞬間を迎えたのだろうかと、胸が熱くなります。

また、別のシーンでは、やはり戦火を避け、米軍基地にいたアメリカの将校と兵士たちが、米軍の飛行機に乗って飛び立とうとする。そのとき、その飛行機に、ベトナムの人たちが乗せてくれと、必死にしがみついてくるのです。すでに離陸態勢に入り、滑走路を走り始めている飛行機に、後部の大きな扉からしがみついて乗り込もうとするベトナムの人たちを、アメリカ軍の将校と兵士が、やはり必死で蹴落とすのです。

それを観ていて、アメリカの兵士はなんと残酷とは思わない。この瞬間、誰もが必死に生きている。誰もが一生懸命に、その瞬間を生きているのです。もし、自分がそのときの米軍兵士だったら、自分は蹴落とさないとと言えるのか。そんな思いがあります。蹴落とす人には、その人の真実がある。蹴落とされたくない必死にしがみついた人にも、その人の真実がある。それが、我々人間の姿ではないのか。そう思うのです。

インタビュアー ええ。

田坂 だから、我々は、この「共感」という言葉の定義を、何十年かけてでも、書き替えていかなければならないのですね。「共感」という言葉の本当の意味は、「目の前で苦しんでいる人の姿は、本当は、自分の姿なのだ」という意味なのですね。